

「過程」重視の聴解指導に関する実践的研究 —第 2 言語の聴解に与える効果および教師の聴解指導観に与える影響—

横山 紀子

1. 研究の背景と目的

海外で日本語を教える教師数は、2003 年現在、3 万 3 千余人に及び、その約 7 割が日本語を母語としない非母語話者日本語教師（以下、NNJLT：Non-Native Japanese Language Teacher）である（国際交流基金 2005）。国際交流基金の付属機関として 1989 年に開設された日本語国際センターは、開設以来累計約 5,000 人の現職 NNJLT を招聘し、日本語・日本文化および日本語教授法の再教育を行ってきた。本研究は、日本語国際センターが招聘した NNJLT 23 人を対象とし、約 6 ヶ月の再教育（実質的な授業期間は約 4 ヶ月半）の効果を検証するものである。ポスター発表では、以下に述べる研究の背景と目的を簡単に述べた上で、【研究 1】～【研究 3】から成る一連の研究計画を紹介した。また、すでに結果を得ている部分については主な結果を図等で提示した。

1.1 海外の日本語教育における聴解指導

海外で日本語を学んだ学習者を国内で日本語を学んだ学習者と比べると、一般的な傾向として、聴解力が低いことが指摘される。日本語能力試験（以下、日能試）の国内受験者と国外受験者の得点平均値（日本語教育学会編 2001）を比較すると、国外受験者は聴解部門の得点が相対的に低い。その要因としては、海外の日本語学習環境における教室外インプットの不足が挙げられるが、そうであるからこそ、海外での日本語教育においては教室における聴解指導に重点的な工夫がこらされるべきだと言える。しかし、現実には、海外の日本語教育現場では聴解指導はむしろ軽視される傾向にある。たとえば、中国の大学における日本語聴解授業の実態について調査した尹(2003:36-37)は、聴解授業はテープを流すだけで教えるテクニックをあまり要しないと考えられていること等を指摘している。本研究の対象者である NNJLT が学習者として受けた聴解指導の実態は、本研究の一部として明らかにするが、尹(2003)の指

摘と同様であることが予想される。

1.2 「過程」重視の聴解指導の必要性

聴解研究は、同じ理解過程である読解において進められた研究を応用して発展してきた。トップダウン、ボトムアップ、相互交流の三つの言語処理過程モデルやスキーマ理論など、読解において構築された理論の導入を受け、聴解が単に意味を受け取る過程ではなく、話し手からのメッセージを自らの既有知識と照合させながら積極的に意味を構築する過程であるとの理解が広まってきている（Rost1990 等）。これに伴い、聴解の「結果」（何が聴きとれたか）を問うだけでなく、「過程」（どのように聴きとったか）を重視する聴解指導の必要性が認識されるようになってきている。（聴解過程に関する研究については、横山 2004c に詳しい。）

NNJLT の再教育においては、NNJLT 自身の聴解力の伸長に向けて「過程」重視の聴解指導を導入し、NNJLT にとって新しい聴解学習とその効果を体験させることが求められる。また、NNJLT が帰国後の日本語指導において、「過程」重視の聴解指導を実践し、海外各地の日本語教育においてその実践が波及効果を及ぼしていくことが望まれる。

本研究では、NNJLT 自身の聴解過程の実態を明らかにした上で、指導を経た変化を観察していくが、その際、対面聴解を調査対象とする。聴解学習ではテープや CD 等の非対面聴解の学習素材が中心的に用いられていること、また、特に聴解テストが非対面聴解の力を測っていることなどの影響を受け、言語学習における聴解と言えば非対面聴解を思い浮かべることが一般的になってしまっているが、実際の言語生活における聴解活動の中心は、言うまでもなく、話し手と向かい合った対面聴解である。そこで、本研究の【研究 1】【研究 2】では、対面場面における聴解過程を調査対象として、以下の課題を設定する。

【研究 1】 NNJLT の対面聴解過程はどのようになっているか (横断的調査)

【研究 2】 「過程」重視の聴解指導は NNJLT の対面聴解過程をどのように変化させるか (縦断的調査)

1.3 第 2 言語教師教育における学習体験の重要性

Freeman & Richards(1996)、Velez-Rendon(2002)は、第 2 言語教師教育の実証研究文献を概観し、教師の言語教育に関する認識や思考は、教師自身が学習者として経験した学習経験の影響を強く受けていることを指摘している。(第 2 言語教師教育に関する研究については横山 2005 に詳しい。)本研究対象の NNJLT の学習観、指導観についても、彼ら自身が学習者として受けた初期日本語教育の影響を強く受けている可能性がある。しかし、同時に、約 6 ヶ月に渡って行う再教育では、新規学習体験が新たな学習観、指導観を形成する可能性もある。本研究では、研究対象とする NNJLT が学習者として受けた聴解学習の実態、教師として行ってきた聴解指導の実態について調査し、初期学習体験が学習観、指導観に与えた影響を明らかにした上で、【研究 3】の課題を次のように設定する。

【研究 3】 NNJLT の再教育において、「過程」重視の聴解指導という新規学習体験は、既得の学習観、指導観を変容させるか

2. 研究の概要

【研究 1】から【研究 3】に共通する調査対象者は、年齢 19 歳～32 歳 (平均 26.5 歳)、日本語教授歴 1 年～5 年 (平均 3.4 年) の NNJLT23 名。日本語運用力は、日能試 3 級の得点率が 65%～95%、2 級

の得点率が 30%～60%。口頭運用力は、OPI 中級下～中級上。国籍は、インドネシア 8 名、ロシア 5 名、タイ 2 名、カンボジア、ベトナム、ネパール、スリランカ、マダガスカル、グルジア、ニュージーランド、コロンビア各 1 名である。

2.1 対面聴解過程の調査

【研究 1】では、上述のような研究課題の下に、次のような調査を行った。調査者が 1 対 1 で調査対象者に向かい、物語テキスト (日能試 2 級以上の語彙率 10～15%程度) を話した。その際、次の 3 種のデータを採取した。(a)対面聴解における質問や反応、(b)聴解直後の再生作文 (母語)、(c)聴解場面の録音を聴き返しながらの回想インタビュー (母語)。(a)(c)を照合し、調査対象者が理解上の問題を解決する方策として「質問」「類推」「放置」などの事例を抽出した。また、理解上の問題を解決する手がかりとして参照されたテキスト範囲を「モニター範囲」として(a)(c)の分析の指標とし、「単語」「文」「段落」「テキスト」の 4 種に分類した。(b)については、対面聴解で聴いたテキストを再生作文と照合し、アイディア・ユニット毎に再生判定を行って再生率を算出した。以上の分析の結果、次の 2 点が確認された。(1)効果的な聴き手は「段落」「テキスト」レベルの「広範囲モニター」を働かせて自らの理解をテキストの広い範囲と照合している。(ポスター発表では、効果的な聴き手とそうでない聴き手 2 人の聴解過程を図示して比較対照したが、本誌では紙面の制約から省略する。)(2)「モニター範囲」は再生作文の再生率と相関関係があり、調査対象者を再生率の高低により 2 群に分けて「モニター範囲」を比較したところ、テキストをよりよく理解し

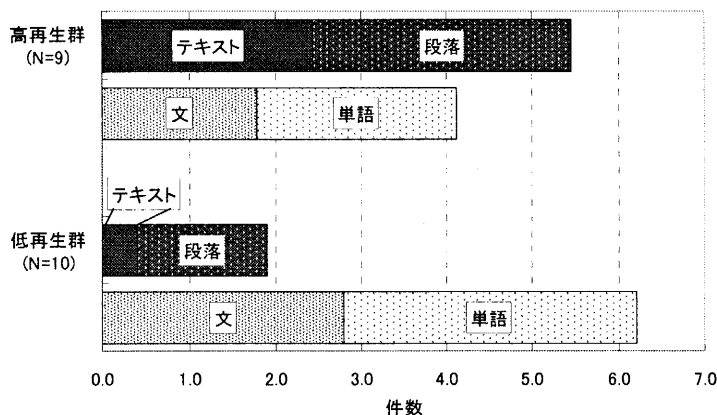


図 1：再生率の高低によるレベル別モニター件数の平均値

た高再生群は、「テキスト」「段落」レベルの「広範囲モニター」を有意に多く用いていることがわかった(図1参照)。

2.2 「過程」重視の聴解指導の効果

【研究2】では、NNJLTに対して約4ヶ月半に渡る「過程」重視の聴解指導を行った後に、【研究1】と同様の対面聴解調査を行い、指導前後の2回の調査結果を比較した。また、「過程」重視の聴解指導が聴解力に及ぼす効果を検証する目的から、指導前後に行った日能試2級聴解部門の成績を統制群と比較した。主な結果は次の通りである。(1)指導後の調査では「広範囲モニター」の使用頻度の平均値が指導前よりも有意に増加し(図2参照)、【研究1】で確認された効果的な聴解過程の特質を身につけたNNJLTが多いことがわかった。(2)指導後の調査では、対面聴解場面での「質問」の頻度が有意に増え(図3参照)、自らの理解の明確化に積極的に関わる姿勢が観察された。また、「質問」の内容も、指導前の「単語」「文」レベルのテキスト部分を確認する質問から「広範囲モニター」に基づいた質問へと移行する傾向が確認された。(3)日能試聴解部門の得点は、群全体では有意な差が得られなかったが、聴解上位群においては実験群の優位が確認された(図3参照)。

指導前後に見られた(1)(2)の変化は自然な運用力の伸びに伴うものである可能性もあり、真に指導の効果であるかどうかは、今後、対面聴解調査についても統制群を設けて検証を行う必要がある。しかし、(3)の聴解力の伸びにおいて実験群が優位であったことは、指導の効果を示唆するものである。

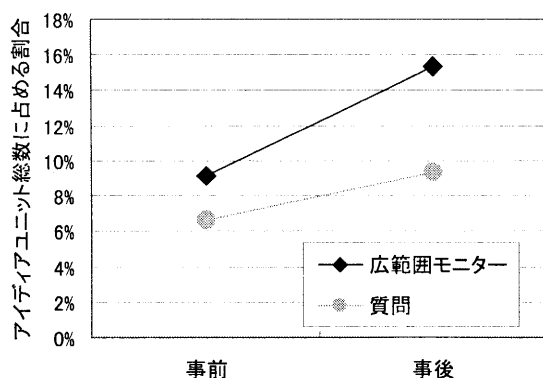


図2：指導前後の「広範囲モニター」および「質問」の頻度(平均値 N=23)の変化

2.3 学習観・指導観の変容

【研究3】では、「過程」重視の聴解指導という新規学習体験を経たNNJLTの学習観、指導観の変容を調べる目的から、次の5つの具体的な研究課題を設けた。(1)海外で日本語を学習したNNJLTは、学習者としてどのような聴解指導を受けたか。(2)学習者として受けた聴解指導は自身の聴解指導にどのような影響を与えたか。(3)日本での「過程」重視の聴解指導による新規学習体験はNNJLTの聴解学習観を変容させるか。(4)日本での「過程」重視の聴解指導による新規学習体験はNNJLTの聴解指導観を変容させるか。(5)「過程」重視の聴解学習体験による聴解過程の変化や聴解力の向上は、聴解学習や指導に関する意識の変化と関連があるか。

研究課題(1)(2)については、インタビュー調査を行い、調査対象のNNJLTが母国で受けた指導がボトムアップ中心、「結果」重視の聴解指導であること、また、彼らが教師となった後に行った聴解指導は自らが学習者として受けた指導を色濃く反映したものであることが明らかになった。研究課題(3)については、「聴解力の向上のために何が必要だと思うか」などの質問に多肢選択で回答する意識調査を指導前後で2回行った。指導前後の回答を比較したところ、聴解力向上のためには「単語や文法をたくさんおぼえること」が大事だとする等、言語知識を重視する回答が減少した一方で、「少しぐらいわからないところがあっても気にしないで、全体の意味に注意して聞くこと」が大事だとする等、聴解の内容や流れを重視する回答が増加し、新規学習経験を

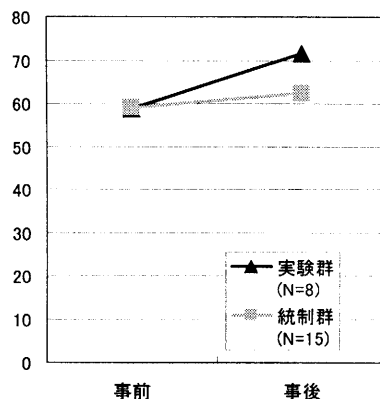


図3：聴解上位群の指導前後の日能試2級聴解部門得点

反映した学習観への変容が確認された。研究課題(4)については、指導前後の2回、NNJLTに聴解指導の教案を書いてもらい、指導を経た変化を分析した。まだ分析途中で最終結果を得ていないが、指導後の教案では、次の3点の変化が予想される。①言語知識ではなく、テキスト内容に焦点を当てた学習活動が増加、②学習者の受信を中心とした活動が減少し、学習者が自由に発信する活動が増加、③聴解の「結果」重視の活動が減少し、「過程」重視の活動が増加。研究課題(5)については、【研究2】で聴解過程の変化や聴解力の伸びが著しかった調査対象者について、そうでない調査対象者と比べて明らかな学習観、指導観の変容が見られるかを分析する予定であるが、未分析である。聴解過程、聴解力の変化は学習観、指導観の変化と関連があり、新規学習体験において積極的な効果を体感した NNJLT は、新規学習体験を反映した学習観、指導観へと変容する傾向が予想される。

3. まとめ

本研究には、まだ未分析の部分があり、現時点で全体を統括することはできないが、この一連の研究により、次のような成果が予想される。海外で日本語を学習した NNJLT の対面聴解過程は、「過程」重視の聴解指導により「モニター範囲」が拡大され、「質問」による理解の明確化が的確に行われるようになった。また、ボトムアップ中心、「結果」重視の初期指導の影響を受けた学習観、指導観は、過程重視の新規学習体験によって変容し、その変容の程度は、新規学習の成果を反映したものであると予想される。今回調査対象とした NNJLT と類似した背景を持つ NNJLT を数多く受け入れて再教育を行う

日本語国際センターの研修では、学習経験と指導観との密接な関係を改めて認識した上で、新規学習体験を積極的に導入した再教育のデザインを考えていくべきであろう。

なお、本研究の一部は、横山(2004a, 2004b)で報告した。

参考文献

- 尹松(2003)「中国の大学における日本語の聴解指導に関する実証的研究」(未公開)お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文
- 国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状』凡人社
- 日本語教育学会編(2001)『日本語能力試験の概要』国際交流基金
- 横山紀子(2004a)「対面聴解における理解過程の分析：理解構築の『流れ』に注目して」お茶の水女子大学日本語文化学会第28回研究会(『言語文化と日本語教育』第28号119-122に要旨掲載)
- 横山紀子(2004b)「『過程』重視の聴解指導：4ヶ月の指導による聴解過程の変化」日本語教育学会秋季大会予稿集、189-194
- 横山紀子(2004c)「第2言語における聴解ストラテジー研究：概観と今後の展望」『第二言語習得・教育の研究最前線-2004年版-』、184-201
- 横山紀子(2005)「第2言語教育における教師教育研究の概観：非母語話者現職教師を対象とした研究に焦点を当てて」『国際交流基金日本語教育紀要』第1号、1-19
- Freeman, D. & Richards, J. C. (1996) *Teacher learning in language teaching*, New York: Cambridge University Press.
- Rost, M. (1990) *Listening in language learning*, Harlow: Longman.
- Velez-Rendon, G. (2002) Second language teacher education: A review of the literature, *Foreign Language Annals*, 35(4), 457-467.

よこやま のりこ／独立行政法人国際交流基金日本語国際センター
Noriko_Yokoyama@jpf.go.jp